

# 幼稚園における「しつけ」の実際

萬代 彰子



二年或いは三年間世話をした子どもたちを小学校へバトンタッチし、また新しい入園児を迎える。3才、4才児を合わせても僅か60名余の子どもたちではあるが、入園式の翌日はどのように子どもたちを迎え入れるかは、とても緊張するものである。毎年いろいろと試みていることでやや成功したと思えることを述べてみたい。

## ① 登園時刻と朝の身仕度

3才児は約20名、4才児は約40名が登園する。先ず4才児と3才児の登園時刻を30分ずらすことにした。

始業午前九時（4才児）とすると、約十五分前から九時までの間に園に到着するよ

うに約束しておく（あまり早く登園してくると疲労する）。園の入口まで母親と一しょに来て、上履とぬぎかえるとにかくひとりで園庭の視診の教師の前にならぶ（入園当初は毎朝私が視診を受け持って担任教師は最初のみちしるべをする）。ひとりずつ鞆の中の視診カードを自分でとり出して「おはようございます」をいう。その時は必ず教師の目をみてからおじぎをするようにさせる。カードに出席の印を押す。すんだ子どもは鞆を入れる所へ行ってエプロンだけとり出し、鞆と帽子は自分の印をおぼえて箱の中へ入れ、庭へ出て遊ぶ。その間まよう子どもがないように、個々の子ども

の名前をよく覚えておき親しく呼びかけながら身じたくをととのえさせる。

## ② 母親からの独立

こうして第一日に母親から離すことに成功した。幼稚園へいけばひとりで何でもしなければならぬという最初のことがかうまくいけばとても楽である。ところが、3才児はそうばかりいかない。やはり不安定な気持を持たせてはならないと思うと、子どもによっては母親と一しょであることも許さなければならぬ。それが4才児と同じ場でまじってくる例外を認めるわけにはいかなないので、視診の時間をずらすことにした。

### ③ 視診

朝の視診ほど楽しみなものはない。それ  
その家から勇んで登園して来た元気な子  
ども、今にも涙が出そうなのをこらえてひ  
どりでやって来た子ども、勢一ぱい努力し  
ている子どもひとりひとりの顔の表情をみ  
るだけ、また子どものあいさつの声をきく  
だけでその日の子どもの生活が予測できそ  
うに思う。

### ④ ミルク給食

しばらくの間は保育時間を約一時間半  
(3才は一時間)とし午前十時三十分に戻  
園することになる。

その間にミルク(五勺)とビスケットを  
間食として与える。したがって午前十時頃  
には玩具を片づけ、手を洗い、用便手洗い  
し、食前のうがいをし、みんなにミルクが  
配り終わるまで待つ。一しよに「ただだ  
きます」と声を出しているうと、ビスケット  
を小さくわって食べる(かぶらない)のと  
交互にミルクを少しずつストローで飲む。  
飲み終わると「こちそうさま」といって牛乳

瓶とストロー、お皿など所定の場へ持って  
いき食後のうがいをする。これらの指示は  
ミルクを飲みはじめている時に、子どもた  
ちに徹底するよう知らせておく。

緊張していた子どもたちがとてもよろこ  
ぶこのミルクとビスケット、お友だちと遊  
べなくて人の遊ぶのを見ていた子どもたち  
も、これできげんをなおして明日もまた幼  
稚園へとよろこんでくる勇気が出るらし  
い。

### ⑤ うがいの励行

少し幼稚園になれてくると、朝の身仕度  
ができ遊びにとりかかる前にうがいをす  
ることにする。コップは各人目じるしのある  
ものを専用にしてあるので、部屋の机の上  
に取り易くしてあるコップを持ち出してう  
がい水(食塩と重曹をとかしたぬるま湯)  
のタンクの栓をゆるめて自分で適量のうが  
い水を入れる。各自が水呑場であうがいをす  
ますと、元の部屋のコップ置場へしまいに  
いく。

これらは早出当番の職員が、間違いなく

用意しておかないと子どもたちに催促され  
る。初めにやった通りの事を繰り返かえさな  
いと子どもたちは混乱をおこす。故に取り  
かかる時は後でやり返さなくてもよいよう  
に周到な準備が必要である。

### ⑥ 片付けの合図と協力

登園して来た子どもたちが思い思いに遊  
びを展開し或る程度満足したと思える頃に  
一斉に片づけることにしている。その時は  
定まったレコードをかける。園内どこにい  
てもその曲が鳴ってくれば、遊んでいた玩  
具を元の場所へ片づけるのである。すつか  
り片づくまで人のも手伝う。そこに協力が  
生れる。その後手洗いの行動に移るので  
ある。

この習慣を徹底させることは最も大切な  
事であると思う。決して子どもたちだけに  
まかせず、教師がその気でやればできない  
ことはないのである。

### ⑦ 用便後

用便は特に3才児の場合ひとりひとりよ  
くみてやらなければならない。用便後はま

ずクレオソート水で手を洗い、ついで水道の栓をねじって水で手を洗うことにしているが、すべて順番を待って、しなければならぬことがいたる所にあるわけである。

### ⑧ 自分の座席

はじめて部屋に入れば自分の座席を知らされる。机とその子どもの身体に適した椅子とに貼紙があつて目じるしをしている。

初めは自由しておいた方がよいという考え方もあるが、子どもというものは、自分の所属がはっきりしている方が安心して落ちつくのである。したがつて靴入れ場、靴入れ場、コップ、机、椅子と、すべて名前と目じるしの貼紙を決めているのである。

こんなことは今更こと新しく述べるまでもないことで、おそらくどの園でもしておられることであろう。

### ⑨ 話しかける時

一組の子どもたちに話しかける時は、机など要らない。一隅に椅子だけ持って来させて（持ち方を決める）全部の子ども顔

が正面に見えるように坐らせる。その時の注意の与え方は「みんなのお腹が、先生と向い同志になるようにこちらを向くように」という。

そこで話をきく時は必ず、教師の方へ向いて、きくことを決める。教師の正面視線の中につきかり、子どもたちが入るように坐る位置を決め、教師は常に正しく椅子に腰かけて安定した姿で話しはじめることにする。この姿勢がくずれると子どももきく姿勢がくずれる。

子どもの名前を「〇〇さん」と呼ぶ「はい」と返事をさせる。友だちの名前に親しむように、また名前を呼ばれたら必ず「はい」といえるように、教師ははっきりと大きい声で子どもの名前をよんでやる。これを毎日くり返すのである。

話し終れば机の位置へ椅子を持ち帰る。そして机に向つて腰かける。この時はグループにより6人が向いあうことになる。

### ⑩ 椅子のしまつ

ここで椅子のしまつの習慣をつける必要

がある。楽器の合図で立つ時も、立てばすぐ机の中へ椅子を入れ寄せてその外側に立つ。また合図で椅子を引き出して腰をかける。これははじめに集団で何回も何回もくりかえす。誰が一番早くできるか競争させてみる。動作のなまいいもの、あわてものなど、合図によつて動作をする子どものそれぞれがよくわかる。

### ⑪ 帰り仕度

帰る前にはエプロンをはずす。そしてそれを正しく四つに折りたたむ。きれいにできるか目を通して子どもたちのでき栄えをほめる。そして靴や帽子ととりかえにエプロンを幼稚園へおいて帰る。帰る身じたくができるとそろつて順番に下履と替える所へいき、履きかえたものから庭に出て二人手をつないで並ぶ。その頃には迎えの母親などが入口に来ている。

ひとりひとりの名前を呼び出して親に引き渡す。その時帽子をとって「さようなら」を大きい声でいうことにする。

### ⑫ しつづけること

順序を追って幼稚園になれることが大切であるが、幼稚園の生活にはどうしても必要な基本的な習慣は先ず当初にこの程度のことを正確にしらせておくことが大切である。幼稚園へいけばこうしなければならぬのだということを感<sup>じ</sup>とらせると同時にこれを繰り返<sup>し</sup>かえし身につけさせるのである。

こちらが順序を間違えずにやらせる限り子どもたちは間違<sup>い</sup>なくよい習慣<sup>づ</sup>けができるのである。し<sup>つ</sup>つけるとはし<sup>つ</sup>づ<sup>づ</sup>けることでもあろう。

### ⑬ 幼稚園では

すこやかな心の基礎を培かうのが幼稚園であるといつても過言ではないと思う。それに役立つのが、規則正しい健康な生活体験である。しらずしらずのうちによいならわしの行なわれている環境<sup>かんげい</sup>によって育てられ、みならいおぼえて身につけていくよい習慣は、身体も心も健康で幸福な社会生活をいとなむのに役立つのである。

子どもたちが安心して新しい幼稚園の生

活になじめるためには、何よりも教師の心が子どもたちの心と通い合うことがなければならぬ。教師と子どもの心がつよく結びついていけば、あたたかいふんいきが子どもたちを素直にするのである。

幼稚園あるいは家庭において子どもたちが心から、教師や親は自分のことを心配してくれているのだ、かわいがってくれているのだという信頼感を持つことができた<sup>ら</sup>、しつけということは、さほどむづかしい問題でなくなるはずである。

ところが、子どもたちが幼稚園に少しなれて子ども本来の姿で生活をはじめると、やはり問題がある。

一つの玩具を二人以上の子どもがどうしてもゆずり合わない。先を争って一番になりたがる。また初めは問題がなかったのに或る時期からどうしても母親を離さない、友だちと遊ぼうとしない、教師のそばへも寄らなくなるなど、これらをよく観察してみると必ず原因がある。子どもの生育歴から家庭の問題、何故そうなるかを知ること

によって解決の方向がわかる。特に幼稚園を休むことはたいへんな問題を残すことがある。久しぶりに登園して来ても、どうしてよいかわからない位生活が進んでいるようにみえて自信をなくする子どもの不安な顔、教師はこの時の子どもの気持をくみとってやるのが大切なのである。そうすればそこに指導の方法があるはずである。

一見なんでもないことが子どもにとって重大な事であることに気がつかなければならぬ。不用意な時間の経過は一度離れた気持をとり返すのにとてもの苦勞がある。

し<sup>つ</sup>つけの根本は最初が大切であることとやはり子どもをよく知ることにあるといいたい。

そのために幼稚園においては、ひとりの教師に与えられる子どもの人数、幼稚園の広さ、遊び道具の数、施設設備などが、子どもたちの自発活動を助けるのに適当であるかどうかというところで勝負がつきそうである。

(大阪学芸大学付属幼稚園)